広島大学短期交換留学プログラム留学生の受講授業の多様性
—日本留学の意義と魅力—

恒　松　直　美

調査目的

本稿では、広島大学短期交換留学（HUSA）プログラム[1]に参加した留学生が広島大学において受講した授業について調査し、HUSAプログラムの留学生が、プログラム参加を通じて広島大学への交換留学をアカデミック面でどのように生かしているかを考察するものである。短期交換留学プログラム参加の特徴として「英語による授業の受講」が挙げられるが、HUSAプログラムは、必ずしも日本語能力を持たない留学生が英語による授業を受講できる体制を整え、新しい日本留学の形を実現したといえる。1996年の設立から10年経過したが、HUSAプログラムに参加した留学生は、広島大学で開講される英語及び日本語による授業を多様に受講している。そこで、HUSAプログラムの留学生は実際にどのような授業を受講しているのか、留学生が短期留学において何を学ぼうとしているのか、その意図と実態を本稿にて考察してみたい。国際社会における大学改革の方向性についてしばしば議論されているが、留学生が示した日本の大学への留学の意義について分析することにより、留学生は日本の大学に何を求めているのかを明瞭にし、今後の大学の国際戦略に役立てて行きたい。本稿では主に「日本語で行われる授業」に挑戦している学生に焦点をあて、参加留学生が多様に授業を選択している姿から日本の大学への短期留学の実践的な意味を浮き彫りにする。

HUSAプログラムは参加条件の一つとして「英語または日本語で授業の受講が可能」という語学能力の基準を設定している。[2]大多数が学部生でHUSAプログラム参加の主な目的として日本語の習得と日本文化理解を挙げているが、英語能力と日本語能力により、HUSAプログラムの留学生は、「英語で授業が受けられる留学生」のグループと「日本語で授業が受けられる留学生」のグループの2種類に分類されて捉えられる傾向にある。短期交換留学プログラムの意義については次項にて詳細に説明するが、短期交換留学プログラムが他の「日本語・日本文化研修」等のプログラムと異なる点は、「英語で行われる授業」が受講でき、それが日本の大学への留学の中で特殊な留学の形であるということである。つまり、短期交換留学プログラムに参加する留学生には必須条件として「日本語能力」は挙げられていない。

その状況下、今回の調査により、HUSAプログラム留学生の中に、短期交換留学プログラムの特徴である「英語による授業」の領域から「日本語による授業」の領域へと挑戦している学生が存在することが分かった。つまり、参加者の中には、英語で授業を受講しながらも、日本語の授業及び日本人学生向けの日本語で行われる授業を受講し、日本の大学

の授業を通じて日本人学生の中に融合していっている学生が存在する。日本の大学に留学している以上、日本語や日本文化に興味を持っているのは当然といえるが、当初「英語でしか授業を受講できない」として参加した学生が、日本語で行われる様々な分野へと興味を広げ、日本語で行われる授業を学部生と共に受講している例があることは、日本留学の意義の考察の視点からも興味深い。

本稿では、HUSAプログラムの参加留学生の出身国と専攻、英語力及び日本語力、1年間の日本語力の向上、日本語力と受講している授業との関連、専攻と受講授業の関連や傾向についての分析も行い、HUSAプログラムに参加した留学生にとっての日本留学は結果として何をもたらし、留学生は1年間の日本留学を実際にどう発展させているかについて実態を把握する試みを行った。短期交換留学プログラムを通じて日本に留学することの留学生にとっての意味と日本留学の魅力についての考察は、学生を「消費者」[3]又は「顧客」[4]として捉える必要性が議論される今日において重要な意味を持つと言えよう。現在、グローバル化する世界の中で、日本の大学は国際競争力を問われている。留学生政策について常に新しい視野から取り組み、今後の大学の国際戦略に役立てていく意味でも、留学生の実体験についての調査は必須である。本稿は、HUSAプログラムに参加した留学生によるHUSAプログラム評価、プログラム修了後の学生のレポート、学生のインタビュー、及び学生の受講した授業のデータをもとに考察する。詳細な分析を行うため、今回の調査は2005－2006年度のHUSAプログラムに参加した学生に焦点をあて綿密に分析した。

短期交換留学プログラムの意義と現状：英語による授業の導入

短期交換留学プログラムの留学生の受講する授業について考察するにあたり、短期交換留学プログラムの意義と現状について、グローバル社会における大学の国際化という視点から整理しておきたい。まず、HUSAプログラム設立の布石となった平成6年度文部省策定の「短期交換留学制度」（平成7年度より「短期留学推進制度」）の意義について確認しておきたい。[5]「短期交換留学制度」の意義を確認することにより、「短期交換留学制度」の当初の目的と比較して、HUSAプログラムの留学生がHUSAプログラムを通じた留学を実際にはどのように生かしているかが明確になると考える。「短期交換留学制度」の設立により、国立大学で単位互換を目的として英語で行われる授業が開講され、欧米豪との短期交換留学が開始された。短期交換留学プログラムの設立は、大学の国際化を促し、大学の教職員及び学生の意識改革を促すとともに、在籍する日本人学生の協定大学への派遣を可能にした。同時に、日本の大学の教授法についての批判の声もあがり、日本の大学の授業の国際通用性が問われることとなった（野水2006：13)。これらの日本の大学にもたらされた変化は注目に値する。野水（前掲）は、今後の短期留学プログラムの発展充実を目指すにあたり、1）大学教育全体の質的改善、2）英語による講義の充実、3）日本人学生の英語力向上、が急務であることを指摘している。

日本の大学において英語による授業の受講が可能になり、必ずしも日本語が堪能[6]でない短期交換留学プログラムの留学生が留学してくるようになったことは、大学の開放性という点から日本の大学の従来のあり方を大きく変革することとなった。日本語で日常生活や問題への対処ができない学生が大多数であることから、学内施設の英語による説明等が必要不可欠になった。また、HUSA プログラムの受け入れ条件として、日本語又は英語で授業の受講が可能であると定めたことにより、日本語で授業の受講が可能なレベルの日本語能力を持たない学生でも日本への留学が可能になった。つまり、留学生にとっても、日本留学の門戸が開かれた。それにより、日本語に堪能でない学生も大学時代に日本文化に触れる機会を持つことが可能になった。日本の大学で英語で授業を受講して単位を取得しながら日本語の授業も受講し日本語力を高めることが可能になったことは、外国人学生の日本社会及び日本文化の理解促進の機会の提供及び日本語力の向上のための支援という面からも評価されるべきであろう。De Wit (2002：192) は、英語でその国の言語・文化・歴史について行われる授業をカリキュラムの中に組み入れることは、それなくしては留学を躊躇する学生にとり、多文化主義的及び多言語主義的な教育を提供する意味でも重要であることを指摘している。この点からも、日本文化や日本社会、及び日本の歴史を含めた多様な授業を英語で提供している HUSA プログラムは、留学生の日本留学を身近なものにしていると言える。[7]さらに、日本語が堪能でなく、自国の文化的背景や授業のスタンダードをもってくる留学生の存在は、教授法を含めた日本の大学のあり方を国際的視野から問い直す機会をもたらした。

したがって、HUSA プログラムは、広島大学の国際化を促す布石となる要素を持つと同時に、プログラムを通して広島大学に留学してくる留学生に日本語力向上の機会と日本文化理解及び国際的体験を持つ機会を与えていると言える。さらに見逃してはならない点は、HUSA プログラムの留学生が、広島大学に在籍する日本人学生に国際交流と異文化理解の機会をもたらしたことである。また、将来的な構想として、日本人学生が英語力を高めることにより、英語による授業を留学生と共に受講できる国際カリキュラムの構築について思案する機会をもたらした。国際戦略としての教授言語の英語化の意味については、英語使用の持つ戦略的意味や、国際化イコール英語ではないことについて、これまで議論されてきている。恒吉 (2006) は、「支配としての英語、文化としての英語、戦略としての英語」に関する考察において、国際化イコール英語力習得と勘違いされがちな日本の現状況において日本人の無頓着な「英語」の持つ政治的・文化的意味について指摘している。恒吉(前掲)は、日本は、植民地支配によって宗主国の原語の使用を強制された経験もなく、「言語の持つ文化的性格や権力性、また戦略性や実践性」について熟考する必要性があまりなかった経験から、「英語の権力性」についての理解があまり教育に繁栄されていない実情を述べている。英語の持つ権力性や英語使用の意味についてのこれらの議論を念頭においたうえで、英語の運営能力をつけることによる国際社会での便宜性について改めてこ

こで確認しておきたい。実践的な英語力を持つことのメリットについてはほとんど議論の余地はなく、英語力をもつことは今日のグローバル社会で活躍するにあたり役立つことは繰り返し指摘されており、学校教育における英語教育改善の必要性と緊急性は当然のように認識されつつある[8]。そして英語の運営能力を持つことにより国際的にも見解を発表でき、発表したものが世界で読まれるという戦略的意味と実践的意味については疑う余地がない。

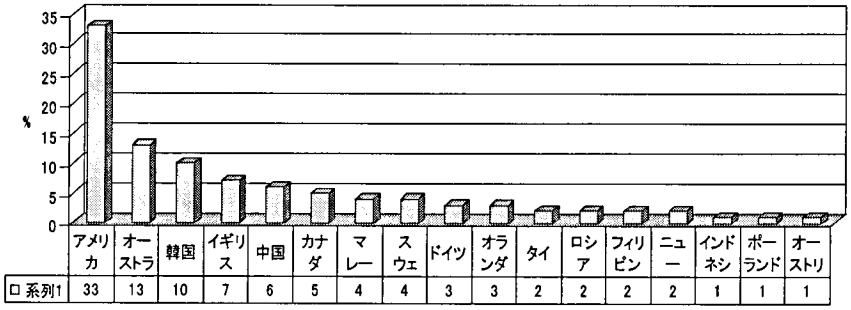
現在発展しつつあるオンライン教育による遠隔授業の実施においても、今後英語を武器に国際的市場で学生の獲得競争が繰り広げられることは容易に予測できる。IT（情報通信技術）を利用した授業の開講は、時間と場所に制約されることなく大学の授業が受講できることを意味する。つまり、グローバルな規模で、受講者は場所を移動することなく受講したい授業を選択できることになる。今や国際的言語となった英語による授業がインターネット上で開講されるということは、全世界の学生が場所の移動なしに受講可能であるということであり、質の高い授業を提供できる大学は国際市場において学生を確保することができる。喜多村（2002：99－103）が述べているように、学生確保をめぐる日本の大学と海外の大学との国際競争は、インターネットでの大学の格付けも含め、現実になりつつある。[9]

大学の国際化：インターナショナリズムとナショナリズム

HUSA プログラムに参加する留学生は、世界各国から多様な文化的背景を背負って広島大学に留学してきている。ここ数年は毎年留学生40名～50名の留学生が HUSA プログラムに参加している。[10] 授業を英語または日本語で受講し、広島大学の学生及び海外の協定大学から HUSA プログラムに参加している留学生との国際交流や日本文化体験のイベント、地域の人々との国際交流などを体験するプログラムであることから、日本文化への適応と英語圏を含めた多文化への適応を要求される特殊な環境を提供している。[11] これだけの多くの国からの留学生がひとまとまりのグループとして運営されているプログラムは、全学で HUSA プログラムのみである。[12] プログラムの開始時点の協定大学が欧米豪の英語圏中心であったことから、グラフ１が示すように、英語圏からの留学生がこれまでの参加留学生数の半数以上を占めている。

HUSA プログラムの設立が大学の国際化を促した点と日本の大学と海外の大学との連携を不可欠とする点から、今一度「大学の国際化」の意味についてここでまとめてみたい。江渕（1997：139）は、大学の国際性の三要素として、１）普遍的価値・真理の探求をめざす学問に内在する「知的普遍主義」（intellectual universalism）の精神に貫かれていること、２）知的普遍主義に根ざすところの「学問に国境なし」という「知的国際主義」（intellectual internationalism）の理念に立脚して、知識を広く世界に求め、また国民の教育だけでなく、外国人の教育にも惜しみなく努力する精神をもっていること、３）これら

HUSA プログラムの国別参加者の割合(%)［2006 Fall 時点］



グラフ１．HUSA プログラム参加留学生の国別割合[13]

（オーストラ＝オーストラリア、マレー＝マレーシア、ニュー＝ニュージーランド、インドネシ＝インドネシア、オーストリ＝オーストリア）

のニーズに応えるための国際的に通用するレベルの研究と開放的な教育システムを整えていること、を挙げている。喜多村（1989：13－15）は、大学の国際的性格は、現代の大学が担っている普遍的知識や価値の探求とその教育という目的及び機能の中に基本として包含されていることを指摘しているが、留学生を大学の教育システムの中に組み込み、日本人学生と共に学んでいく体制を整備することにより、大学の持つ普遍的知識の探求という機能をより高めていくことになるとも言える。「いかなる大学も特定の国、国民、地域、地方の歴史、文化、社会と隔絶して存在しえず」（前掲：15）、異質な思想や文化との接触に対して開放的である場所が大学であるべきであるという喜多村の指摘は、多くの留学生を抱える大学での教育の意義と現状を考察するにあたり、的を得た指摘であると同時に、留学生を抱える大学が今後どのように国際的教育を発展させていくかについての検討の必要性を示唆している。

Kelly（2000：161）は、国際カリキュラムについての研究論文において、コミュニケーションや運送システムのグローバル化により国や地域を越えた相互依存が高まり、明日のリーダーとなるのは国家間の境界を越えて活躍できる人々であるという Gale（1997：107）の指摘に言及している。異文化を理解し、異なる価値観を尊重し、世界の人々とのつながりの中で共生していく知識を身につけていくことの必要性は誰もが認識しなければならない時代となった。大学における知識習得というアカデミズムの中での知的国際主義にとどまらず、日常の生活において実際にその知識を応用できなければならない。

大学の国際化の議論においてとりあげられるのが、大学が置かれている「地域性」及び「国民性」という、「国際性」と相対立する志向性である（前掲：13－15）。大多数の教授陣は自国の人材で構成され、教育の対象は自国の学生であることから、喜多村(前掲)は、大学の健全で生産的制度を確立するためには、大学のインターナショナリズムとナショナリズムのバランスを保つ必要性を説いているが、広島大学においても同様の問題が存在している。「英語による授業の受講」を特徴とする HUSA プログラムの留学生が、どの程度

広島大学の中に融合し、広島大学自身の持つ日本の大学としての特性に適応しようとしているかの問題は、広島大学のインターナショナリズムとナショナリズムのバランスの問題とも関連する問題である。

英語で行われる授業が受講できる状況にある中、「英語で授業の受講が可能」である条件を満たして参加したHUSAプログラムの留学生が、予測以上に、自分の日本語能力の限界に挑戦し、日本語による授業を受講していることが今回の調査から分かった。その現状については後ほど分析する。[14] 日本語力を向上させ、「英語堪能グループ」から「英語及び日本語堪能グループ」へと移行している例、及びその逆の「日本語堪能」グループから「英語及び日本語堪能グループ」へと以降している例もある。英語で行う授業を受ける留学生が大多数を占めるHUSAプログラムと、「大学のインターナショナリズムとナショナリズム」との関わりを見た場合、日本語で日本人学生用に行われる授業を受講している学生の存在は、広島大学のナショナリズムを留学生が尊重し、その中に溶け込もうとしている形であるとも理解できる。また、自分自身の日本語能力の限界に挑戦し、日本語で日本の大学で行われる講義内容を理解しようとしている試みでもある。

「英語で行われる授業」については、英語圏のスタンダードに基づいた議論になる傾向にある。その状況下、「英語で行う授業の受講が可能」として参加した学生が、興味をもった日本語で行われる授業に挑戦している姿は、ただ単に日本の大学に英語圏のスタンダードへの適応をせまるのでなく、留学生が自ら日本の大学のスタンダードへ順応していこうとした例と言えよう。こうみてくると、HUSAプログラムの留学生は必ずしも参加時点の言語グループとして分類することはできず、留学生は短期交換留学プログラム設立当初の意義とは異なる点においても広島大学への留学を生かしていることが分かる。また、その挑戦をしなかった学生は、英語圏同士の学生や、英語が堪能な学生とのみ交流し、英語圏での生活を日本に持ち込んだ形で生活した例が多い。それは、決して日本人との交流に興味がなかったことが理由ではなく、日本語力の不足や日本人学生との交流の機会を持てなかったことにより、いやおうなしに英語圏の環境の中に身をおいてしまった例とも言える。つまり、HUSAプログラムは、「英語で行われるプログラム」である故に、日本語力を持たない学生にとっては、日本語能力を伸ばすことや日本人学生との交流の機会を持つことを切望しつつも、日本にいながら日本人と交わる機会を持てない状況を生み出すことも多い。HUSAプログラムの留学生からは、授業及び普段の生活において日本人学生と交流することを望みながら実現しにくいという声をよく耳にする。

短期交換留学プログラムの参加条件：講義言語と留学生の挑戦

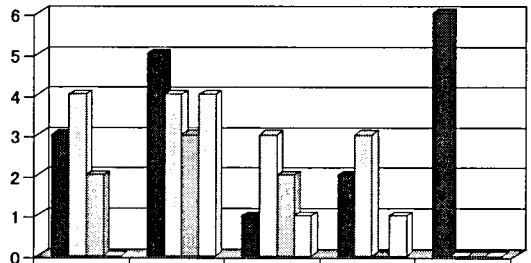
英語と日本語の言語能力の違いにより留学生の受講する授業やコミュニケーション言語が異なることから、HUSAプログラムの留学生は「英語堪能」か「日本語堪能」かにより、グループを作る傾向もある。しかし、この2つのグループは、必ずしも明確に線を引いて

分類できるわけではない。「英語・日本語両言語とも堪能」グループに所属する留学生が存在することと、「英語グループ」と「日本語グループ」の学生は、堪能として参加した言語でない言語で行われる授業に挑戦していることが今回の調査から分かり、HUSA プログラムの留学生はかなり多様な形で言語グループを形成していることが明らかになった。

英語で行われる授業は「特別コース」(special course) として HUSA プログラムの留学生のみに開講されており、原則として日本人学生は受講していない。HUSA プログラムの留学生が受講できる授業は、大別して、1）HUSA 留学生のみに英語で開講される特別コース（special course)、2）学部に在籍する日本人学生用に開講されている授業で HUSA 留学生の参加により必要があれば英語で補助教材を提供する授業 (regular course) [15]、3）学部に在籍する日本人学生用に日本語で開講されている授業（other course)、4）留学生向けの初級・中級・上級（5 レベルに分類）の日本語の授業に分けられる。[16] 1 学期あたり最低10単位を取得することが義務付けられており、その条件を満たせばどのような組み合わせで授業を受講してもよい。その結果、留学生の授業の組み合わせはかなり多様である。

HUSA プログラムに参加する留学生の日本語力は初級・中級・上級まで様々で、専攻も多岐に渡る。例えば、2005－2006年度の HUSA プログラムの参加留学生の自国の大学での専攻は、経済、英語英文学、日本語日本文学、会計学、政治学、哲学、法学、マネージメント、東アジア研究、ビジネス、コミュニケーション、機械工学、環境科学、生物学、化学、言語学、歴史、コンピューター、教育、工学、生理学、グラフィックデザインと多様である。留学生は、たいてい日本語と自分の専攻に関する科目を受講授業のリストに入れている。短期交換留学中に専門の授業が広島大学で開講されていれば、受講したいと考えるのは当然であろう。それでは、HUSA プログラム留学生の日本語のレベルについてみてみよう。

日本語レベル別留学生数［2005 Fall］



	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
■ アジア	3	5	1	2	6
□ アメリカ・カナダ	4	4	3	3	0
▨ ヨーロッパ	2	3	2	0	0
□ オセアニア	0	4	1	1	0

グラフ 2．2005年秋学期（1 学期目）の日本語レベル別留学生数（地域別）

［日本語の授業の受講者数合計は44人］

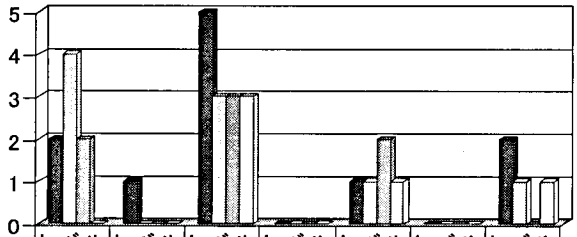
グラフ２が示すように、日本語の授業のうち、受講者数が最も多いのはレベル２（日本語初級Ⅱ）で、地域的にもアジア、アメリカ・カナダ、ヨーロッパ、オセアニアと、多様である。レベル５（日本語上級）を受講しているのは、アジア人学生のみである。

さらに、学生の日本語力・英語力により、受講する授業のパターン、組み合わせも様々である。自分の日本語レベルに合った初級から上級までの日本語の授業を受講しつつ、日本語で授業の受講が可能でない学生は、英語で行われる授業を受講できる。HUSA プログラムに参加する留学生は英語・日本語の語学能力の視点から主に次の３種類のカテゴリーに分けられる。１）英語で授業の受講が可能である条件を満たし、日本語力が低いため、日本での生活でほとんど日本語を使用しない学生、２）英語で授業の受講が可能である条件を満たして参加したが、日本語レベルがレベル２～レベル４であるため、日常生活でも日本語を使用し日本語力を向上させる学生、３）日本語上級レベルで、主に日本語で行われる授業を受講し、日本語での生活が可能な留学生、である。日本語能力には学生によりかなりばらつきがあることと、日本滞在中に日本語能力がどの程度向上できるかは個々の学生により異なるため、単純に３種類に分類することはできないが、来日時点の英語および日本語の語学能力に基づいてここでは３種類に大別した。

HUSA プログラムの参加条件として、日本語の授業の受講は義務付けられていないため、日本語レベルに関わらず、日本語の授業を受講するかどうかは学生の希望次第である。３）の学生はたいてい上級レベルの日本語の授業を受講し、他には日本語レベル５の学生のみ受講できる日本語・日本事情の日本語で行われる授業や、各学部で日本人学生向けに開講されている授業を他の日本人学生と共に受講している。１）の大多数の学生はレベル１（初級Ⅰ）及びレベル２（初級Ⅱ）を受講し、それに加え英語で開講されている授業を受講している。２）の学生はレベル２（初級Ⅱ）～レベル４（中級Ⅱ）の日本語の授業を受講し、英語で開講されている授業を受講すると同時に、日本人向けに日本語で開講されている授業に挑戦している学生も存在する。HUSA プログラムの留学生はほぼ全員が学部生であり[17]、日本に留学する主な目的の一つが日本語及び日本文化を学ぶことである傾向が強いことから、HUSA プログラムに参加する留学生のほぼ全員が初めの学期にはいずれかのレベルの日本語の授業を受講している。

それでは、受講した日本語の授業のレベルが１学期目（2005年秋学期）から２学期目（2006年春学期）にかけてどう変化したかを見てみよう。[18]

日本語レベルの上がった留学生数［2005 Fall から2006 Spring］



	レベル 1-2	レベル 1-3	レベル 2-3	レベル 2-4	レベル 3-4	レベル 3-5	レベル 4-5
■アジア	2	1	5	0	1	0	2
□アメリカ・カナダ	4	0	3	0	1	0	1
▨ヨーロッパ	2	0	3	0	2	0	0
□オセアニア	0	0	3	0	1	0	1

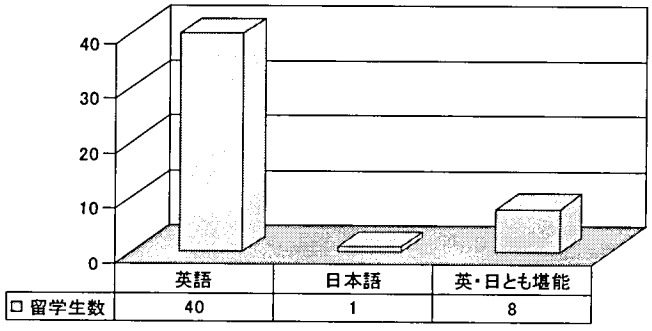
グラフ３．2006年度春学期（２学期目）のレベル別にみた日本語レベルの向上（地域別）

［日本語のレベルが上昇した学生の合計数は32人］[19]

アジアからの留学生ではレベル２からレベル３に伸びた学生が目立ち、アメリカ・カナダからの留学生ではレベル１からレベル２に伸びた学生が目立つ。また、２段階レベルアップした学生は、レベル１からレベル３に伸びたアジア人学生一人である。レベル２からレベル４とレベル３からレベル５に伸びた学生はいなかった。HUSA プログラム留学生の日本語能力の状況を把握したうえで、次に、留学生が日本語で行われる授業に挑戦している現状について分析したい。

学生の受講授業を分析してみると、授業の受講条件に厳しい設定のない HUSA プログラムを広範囲に活用し、かなり幅のある受講の仕方をしていることがわかる。日本語の授業のみを受講する学生、参加時点から日本語が上級であるため、上級日本語と日本事情の授業を受講する学生や、それに日本語で行われる授業を組み合わせる例、日本語と英語で行われる授業を組み合わせる学生、当初は英語で行われる授業しか受講できなかった学生

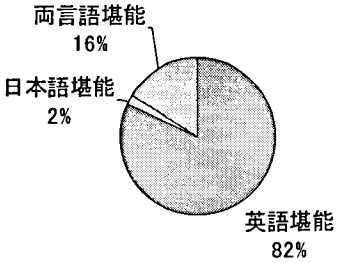
留学生の堪能言語［2005―2006年度・2005 Fall 参加時点］



グラフ４．HUSA プログラム参加留学生の堪能言語（英語・日本語）

（2005－2006年度：2005年秋学期参加時点）[20]

両言語（英語・日本語）堪能な留学生の割合［2005 Fall］

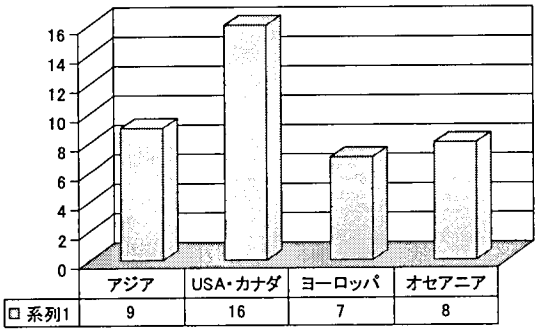


グラフ５．両言語（英語・日本語）堪能な留学生の割合（2005年秋学期）

も、日本語力が伸びてくると、２学期目に日本語の授業に加え日本語で行われる学部の授業を受講する例など様々である。HUSA プログラムの参加者の英語及び日本語の言語能力をみると、「英語で授業の受講が可能」である参加条件を満たして広島大学に留学してきた学生の数は、「日本語で授業の受講が可能」又は「英語・日本語両言語で授業の受講が可能」の条件を満たして留学する留学生と比較し、毎年圧倒的に多く、グラフ５（2005年度秋学期）が示すように80％を越えている。

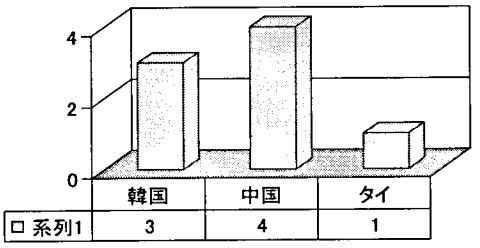
興味深いのは、グラフ４が示すように、「英語及び日本語の両言語で授業の受講が可能」

英語堪能で参加した留学生の地域別参加学生数［2005 Fall］



グラフ６．英語堪能で参加した留学生の地域別参加学生数（2005年秋学期）[22]

両言語（英語・日本語）堪能で参加した留学生の国別参加学生数［2005 Fall］

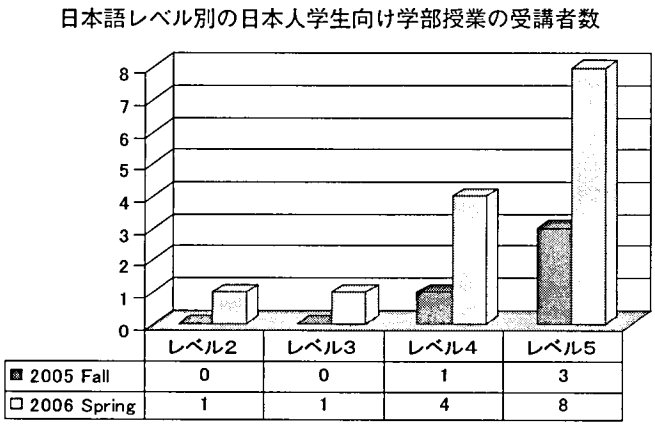


グラフ７．両言語堪能（英語・日本語）で参加した留学生の国別参加学生数（2005年秋学期）

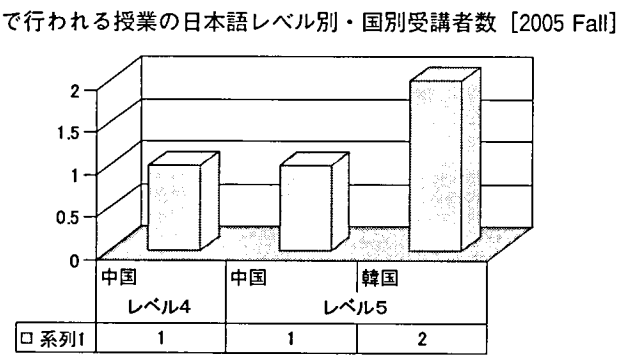
な学生が49名中８名も存在したことである。[21]「日本語のみ堪能」で参加した韓国人学生が１名いることから、参加時点の2005年秋学期から日本語で授業の受講が可能な学生の数は49名中９名ということになる。次に「英語堪能」で参加した留学生の地域別参加学生数と「英語・日本語の両言語堪能」で参加した留学生の国別参加学生数を見てみよう。

グラフ６から分かるように、「英語堪能」のグループでアジアからの留学生が参加者の約５分の１を占めているのは興味深い。グラフ７が示すように「英語及び日本語の両言語堪能」グループには、英語を母国語とするアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスからの留学生はいない。つまり、英語のネイティブ・スピーカーは参加時点では「英語のみ堪能」で日本語は堪能でないということになる。アジアからの参加者には、「日本語のみ堪能」な学生と「英語及び日本語の両言語堪能」な学生の両方が存在する。

それでは次に日本人学生向けに学部で日本語で行われる授業の受講者について分析したい。グラフ８が示すように、参加時点の2005年秋学期と比較し、２学期目の2006年春学期には日本語で行われる授業の参加者が増えている。受講者の日本語レベルも2005年秋学期

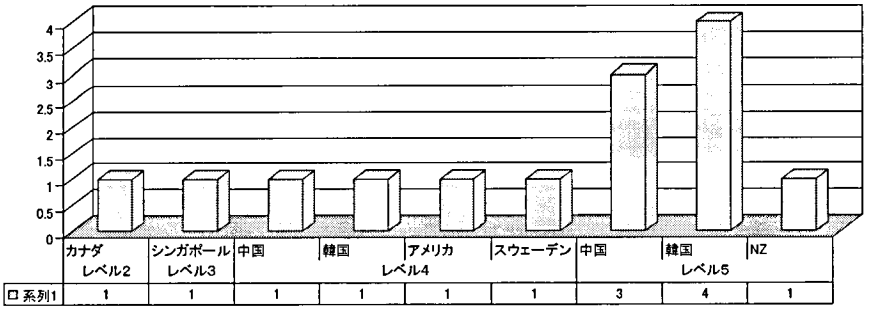


グラフ８．日本人学生向け学部授業の日本語レベル別受講者数[23]



グラフ９．日本語で行われる授業の日本語レベル別・国別受講者数（2005　秋学期）

日本語で行われる授業の日本語レベル別・国別受講者数［2006 Spring］



グラフ10. 日本語で行われる授業の日本語レベル別・国別受講者数（2006年春学期）

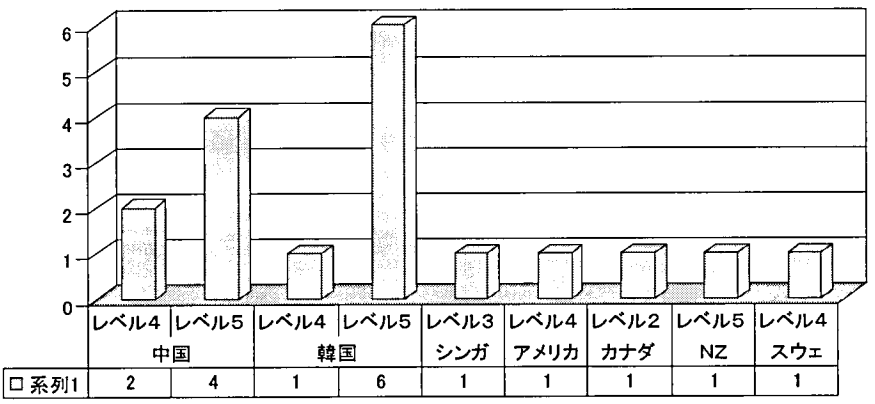
（NZ＝ニュージーランド）

はレベル４と５の学生のみであったのに対し、2006年春学期では、レベル２から５までの幅広い日本語レベルの学生が受講している。２学期目になり、日本の大学の授業に慣れてきて自信がつき、日本語で行われる授業に挑戦したとも解釈できる。

また、受講者数の国をグラフ９及びグラフ10で見てみると、参加時点の2005年秋学期には、自分の日本語力に自信のある日本語レベル４とレベル５の中国と韓国からの留学生のみが受講しているが、２学期目の2006年春学期には、レベルは２からレベル５の幅に広がり、また国の範囲もかなり広がっていることが分かる。

また、グラフ11が示すように、一年を通して日本語で行われる授業を受講した留学生について国別に延べ人数を見てみると、韓国７名、中国６名と、当然であるが、参加時点から日本語堪能な留学生の出身国が多く、残りは２学期目に日本語能力を伸ばした学生が、各国１名ずついる。

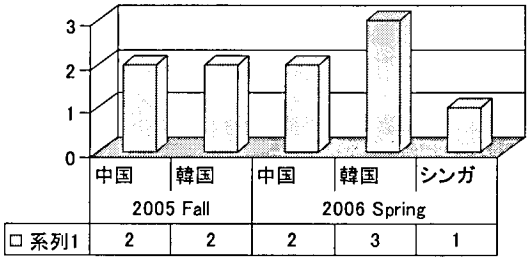
日本語で行われる授業の国別受講者数［2005 Fall 及び2006 Spring］



グラフ11. 日本語で行われる授業の国別受講者数（2005 秋学期及び2006年春学期）

（NZ＝ニュージーランド、スウェ＝スウェーデン）

英語による授業と日本語による授業を同時受講している学生の国別数
[2005 Fall・2006 Spring]



グラフ12. 英語による授業と日本語による授業を同時受講している学生の国別数[24]
(2005年秋学期・2006年春学期)
(シンガ＝シンガポール)

次に、グラフ12で示した英語による授業と日本語による授業の同時受講者数をみると、中国・韓国が大多数を占めており、自国の言語でない英語と日本語の両言語において授業を理解できる力をつけようとしていることが分かる。これはHUSAプログラムに参加することによりが英語能力及び日本語能力を伸ばすことが可能であり、それを学術レベルにまで伸ばせることを活用している例であるといえよう。

これらのデータから、日本留学を専門知識の習得の場とすると同時に、日本の大学に短期留学する機会を最大限に生かし、日本語や日本文化・社会の理解を含めた多様な知識習得の場としているとも言える。

HUSAプログラム留学生の多様性と日本留学の魅力

総合大学における短期交換留学プログラムの多くは、全学的な協力体制を組み、幅広い専攻分野の交換留学生を受け入れている（野水：2006：15)。広島大学では、生物学、経済学、社会学、言語学、政治学、教育、日本研究、文学、工学、環境科学、数学、化学等の幅広い分野で英語による授業が開講されている。HUSAプログラムの留学生が受講できる授業科目を分野別に大別すると、1）日本語・日本事情、2）日本研究に属する科目、3）各専門分野、4）一般教養科目、となる。野水（前掲）が指摘するように、短期交換留学プログラムの留学生の専門分野が幅広いため、なるべく多くの学生が受講できる授業にするためには、概論的な講義が必要となり、受け入れ留学生が学部3年または4年である傾向からすると、専門分野の講義として満足度が低くなることが懸念されるのは広島大学でも同様である。しかし、英語で各学部からボランティアで開講している現状では開講科目数を維持していくことも難しく、各分野でより専門性の高い授業を英語で開講するためにはシステムの改革が必要となる。

野水（前掲)[25]は、短期交換留学プログラム全体に学生が満足を得ている理由として、短期交換留学生が様々な分野の学生と交流できること、専門分野の習得よりも日本人学生

や正規学部留学生が講義に加わることにより異なる文化体験をすることを希望していることを述べている。この点は、短期留学の意義として、留学生が求めているものは何かを考察するにあたり見落としてはならない点である。また、HUSAプログラムにおいても今後改善の必要な項目である。ひとつは、まずHUSAプログラムの英語で行われる特別コースは、HUSA留学生向けで、日本人学生には開講されていない。せっかく日本の大学に留学しながら、日本語で授業の受講ができるレベルの日本語力を習得していなければ日本人学生と共に授業を受講する機会はほとんどなく、授業で他の日本人学生と知り合うきっかけがないことについて、多くの短期交換留学プログラム留学生が残念に思っている。しかし、英語力不足から日本人学生の英語で行われる授業への組み込みは大変難しい状況にあり、何らかの対策が必要である。[26] もう一つの改善点は、様々な国からの留学生及び多様な分野を専攻する留学生が交じり合うのは大変良いことであるが、現状況では、英語による授業がHUSA留学生のみに開講されていることや、日本人との交流が思った程促進されていないことから、留学生同士が授業及び生活全般において固まる傾向にあり、日本人学生との交流が妨げられている現実もある。

留学生と日本人学生が共に学べるカリキュラムの構築は、国際化を目指す大学の今後の目標であろう。有本（2003：20）は、著書「大学のカリキュラム改革」で、カリキュラムにおける現状の問題として、教養教育と専門教育の分離状態を組織的・機能的にいかに統合していくかを挙げている。環境、国際、人間、情報、福祉、心理などの新しい名前の学科・学部は従来のディシプリン型からミッション型[27]の学科・学部への移行の所産であり、「個別の学問のみから成り立つカリキュラムの時代は終わり、種々の学問が協力して『学際的』あるいはさらに『学融的』なカリキュラムを構築する時代が開幕した」という有本（前傾）の指摘は、留学生のカリキュラム構築においても参考になる。

例えば、HUSAプログラムに参加する留学生は、「学際的」そして「学融的」に、またとない広島大学での短期留学の機会を活用し、専門外の授業も含め幅広い範囲の授業を受講していると言えるのではないであろうか。HUSAプログラムに必ずしも多くの専門科目が英語で開講されていなくとも、日本人を含めた多様な文化的背景を持つ学生と交流して見聞を広め、枠に捉われず多様な授業を受講できる機会を貴重な体験と見なしている可能性は大きい。広島大学で授業選択の枠をはずされた交換留学生は、ある意味自分の興味と交換留学の本当の目的を露呈した形で授業を選択していると言えるであろう。交換留学中の受講科目の選択について自国の大学による制約がない限り、または、受講必須科目が設定されているとしてもその必須科目を受講すれば、あとは自分の興味で広島大学での授業が幅広く選択できる。大学時代にしか体験できない短期交換留学において、学生は制限されたカリキュラムよりも幅広く様々なことを体験できる機会を求めているとも解釈できる。交換留学の理想は、単位互換をすることで卒業を遅らせることなく留学することであるが、仮に卒業が遅れたとしても人生の中でまたとない一年の交換留学を最大限に活用し、

幅広く授業を受講してみたいと希望するのは自然なことであろう。それでは、数例を挙げて、実際にHUSAプログラムの留学生がどのような授業を受講しているか考察してみたい。

「日本語及び英語の両言語堪能」として参加した日本語・日本文学専攻の韓国人学生3人は、参加時点の2005年秋学期から、日本語で、日本語の言語学関係の科目に加え、英米文学関係、英語の言語学関係の授業を受講している。さらに英語では、コミュニケーション、英米文学関係、英語の言語学関係、日本語教授法を受講している。日本語・日本文学専攻の学生は、言語学的な興味や他文学への興味から英米文学や英語の言語学の分野へと幅を広げて受講する傾向があることが分かる。

自国の中国で外国語学部で日本語を専攻する中国人留学生は、日本語は上級(レベル5)で日本語と英語両言語とも堪能であったため、2学期間に渡り、日本語で行われる授業と英語で行われる授業の両方を幅広く受講している。日本語では「日本の思想哲学」等の日本関係の科目を受講し、さらに「国際経済学」、「簿記」、「ヨーロッパ市民社会」、「法と市民」、「ビジネス英語」など幅広く受講すると同時に、インターンシップを日本企業にて体験した。英語では、日本社会とジェンダー、日本経済、日本文化と教育、日本の家族生活など日本関係の科目に集中して受講している。受講科目の分野に制限のないHUSAプログラムへの参加を最大限に活用した例と言えるであろう。

日本研究を専攻する他の中国人留学生は、広島大学の協定大学であるドイツの大学に留学中にHUSAプログラムに参加した。2学期目には、日本語でインターンシップコースを体験し、現在の留学先であるドイツの言語力を日本で伸ばすため、日本語で「ドイツ語訳読法」を受講しているのは興味深い。ドイツの協定大学に留学中の政治学・哲学専攻のシンガポール出身の留学生は、日本語レベル3でありながら、専門分野の「日本政治論」「資源エネルギー論とアジアの政治」に日本語で挑戦している。専門分野の知識を高めること、それを日本語で理解できるよう努力している例である。

日本語で行われる外国語の授業を受講した学生が数人いる。日本語を専攻する中国人学生、及び日本語と会計学を専攻するニュージーランド出身の学生が、専攻外の「韓国語」を2学期目の2006年春学期に、共に日本語レベル5で日本語で受講している。さらに、2学期目の春学期に、コミュニケーション・文化専攻の日本語レベル2のカナダ人学生及び工学専攻で日本語レベル4のスウェーデン人学生が「基礎スペイン語Ⅰ」を日本語で受講している。比較文学専攻の日本語レベル3の中国人学生は、2学期目に日本語で「ラテン語」「ギリシャ語」を受講している。こうみてくると、日本語のレベルが必ずしも上級レベルでなくとも、専門外の日本語で教えられる言語の授業を受講し、新しい言語習得に挑戦している例は少なくない。自国の大学で受講できなかった授業や興味のある分野へと学問的興味を広げている。また、生物専攻のアメリカ人学生は2学期目に日本語レベル3で、「彫刻表現実習基礎」を日本語で受講しており、自分の興味を広げた例である。

また、音楽では、「日本音楽演習」で琴の授業を受講した18人のHUSAプログラム留学生は音楽専攻ではなく、日本語力・英語力とも多様である。このクラスは日本語で行われる授業であるが、英語の通訳がついていた。日本でしか学ぶことのできないであろう日本の伝統的な楽器である「琴」の授業を音楽専攻でない学生が多く受講していることからみても、日本の大学への留学はただ単に日本語習得と専門分野の知識習得ではないことが分かる。また、スポーツの授業では、バドミントン、卓球、サッカー、テニス、バスケットボール、バレーボール、武道（剣道）の授業を日本語レベル1から5まで、男女とも幅広く受講している。2005年秋学期にスポーツの授業の受講人数は14人で、そのうち4人が2つのスポーツの授業を受講しており、2006年春学期のスポーツの授業の受講人数は5人である。スポーツの授業では、日本語レベルが低くてもあまり問題とならないことから多くの留学生が受講しているものと思われる。日本人学生も受講しているので、授業で日本人学生と知り合える良い機会である。

現在、大学の変革の必要性について頻繁に議論されている。大学の学生支援においての議論でアカデミックな側面のサポートのみでなく、学生が人生の方向を見つけられるよう多面的にサポートする環境を作り上げることの重要性が新しい大学のあり方として最近認識されつつある。例えば、Spies（2000：27）は、学生が知識を習得し見聞を深めていくためには、知性・感情・スピリチュアリティ[28]の面で自己を高めていくこと（intellectual, emotional, and spiritual development）が必要であるという。つまり、知性と感情、そしてスピリチュアリティのバランスの必要を提言している。そのためには、人生における状況理解能力、実際的な事柄を成就するに適切なスキル、そして個人が切望するもの（aspiration）と社会全体が切望するものとのバランスが必要であるという。

Spies（前掲：27−28）は、これらが必ずしも大学のカリキュラムで無視されているわけではないが、知識自体が学部や専門に細分化され、学習者は、大学の専門分野によって分割され権威を重視する環境の中で、狭い学問分野でのみの機能的な専門化になることを期待されていることについて批判的見解を述べている。細分化された専門分野に学問が分割されている現状の中で、Spies（前掲：28）は、複数の学問分野にまたがって研究を進める学際的な（multidisciplinary）アプローチのみが、複雑な問題を研究する実践的方法であると指摘する。その意味でも、HUSAプログラムの留学生が日本留学中に自ら取り組んでいる学際的な授業の選択の方法は、枠に捉われない多様な分野で学ぶことの意義を学生自らが見出し実践したものといえるであろう。

結論：大学の国際競争力と学生にとっての留学の意義

喜多村（1996：2）は、その著書「学生消費者の時代―バークレーの丘から」の中で、「大学と学生の関係を、教育サービスの提供者とこれを学費として購入する学生という経済的関係」として問題提起を行っている。アメリカの高等教育は1980年代から直面した青

年人口の急減、大学進学熱の頭打ち、高等教育財政の悪化を背景とし、学生消費者主義の時代を迎えたが（前掲：9）、日本の大学は現在まさにその問題に直面しており、学ぶべき点は多い。そして今、日本の大学はアメリカを含めた他の国々の大学とも国際的競争市場において学生の獲得競争に直面しようとしている。世界中の学生がよりよい勉学の機会を求めて国境を越えて留学したり、インターネット上での授業受講が可能になった現在、日本の大学は、いやおうなく国際市場の中での競争にさらされる時代となった。喜多村（2002：95－96）は、国内の少子化により、国内需要（日本人学生）では学生が「調達」できない状態となり、現在では留学生は無視できない巨大な潜在力を持つ市場であるという。つまり、日本の大学にとり、留学生の存在は、もはや一部の少数の存在ではなく、大学が国際競争力を持ち、戦略的に生き残るためにも必要不可欠な存在であることの認識が必要であろう。

喜多村（前掲：96）は、学生募集の国際競争の鍵は、「日本の大学が諸外国の大学に比してどんな魅力があり、違いや個性はどこにあるか、教育・研究の質的水準が国際的な競争力をもち、単位や学位は国際的適用性をもつかといった、国際評価」であると言う。自国の大学に在籍中に休学することなく日本に留学する機会をもたらす短期交換留学プログラムは、留学生にとり大変魅力のあるものであり、その国際評価を上げる一因ともなる。近年、私費でもHUSAプログラムに参加を希望する学生が毎年増え続けているが、HUSAプログラムは、あくまで交換留学プログラムであり、日本人学生の派遣と受け入れ留学生のバランスをとる必要があること、また、プログラム担当人員が数名であることから、受け入れ可能な留学生数には限りがある。したがって、現時点では、HUSAプログラムの受け入れ留学生数を増やせない状態となっている。参加希望者が年々増加しても協定人数以上は受け入れることはできず、現時点では、各協定大学から協定人数の上限で希望者を全員受け入れれば、参加者は150名のマンモスプログラムとなる。

短期交換留学プログラムの参加希望者は、広島大学への留学に魅力を感じている潜在力である。国際社会の中での将来的な大学像を思い描くにあたり、このような留学生の存在とその視点は見逃してはならない存在である。これは単に大学が生き残るためとか、留学生が広島大学にもたらす利潤だけの次元から捉えるだけの問題ではない。学業において、仕事において、また様々な事情において人々が国を越えて移動し、異文化圏の人々と接するのがあたりまえになった現在、異国の人々と日ごろから接し、異なる価値観や基準に触れることは、国際社会の一員として世界の人々と共存していくために必要であろう。そのための学びの機会を留学生は日本人学生及び職員、そして地域社会にももたらしてくれる存在である。大学時代に貴重な異文化体験を与えてくれる留学生と共に学んでいくことの意義を、国際社会における大学教育の発展という視点からもう一度問い正してみる必要があるのではないか。

「知的普遍主義」及び「知的国際主義」[29] について議論されているように、大学の教育

は将来的に日本人学生のみでなく全世界の学生に向けられることを目指すべきである。HUSAプログラムは、留学生と日本人学生が共に国際的体験を持てるプログラムを構築する布石となる可能性をもたらした。留学生は日本人学生と共に授業を受講できることを切望している。そして日本人学生の中にも同様の認識を持つ学生が多い。喜多村(1996：245)は、青年人口の減少により、学生中心主義が強化されることで大学が学生確保に重きをおくようになり、大学の教育及び研究の水準が低下する危険性についての懸念を表明している。単なる学生消費者主義に陥らず、「常に新しい知識・技術を習得する意欲や能力を持つ人間形成」に向けて学生が自主的に学ぶことを希望するよう大学が手助けするべきであるという喜多村の見解は(前掲)、学生獲得競争において大学の陥りがちな盲点を指摘し、教育の本来の意義に気付かせてくれるものである。HUSAプログラムの留学生は、授業の選択において枠のないプログラムの特徴を最大限に生かし、自ら興味のある分野で能力を伸ばそうとする学生の意欲を映し出している。今後の広島大学の国際化と教育の発展について考察していくにあたり、全世界の協定大学から広島大学に留学してきた留学生が多面的に自己の能力に挑戦している姿を、広島大学に留学する多面的な魅力を留学生が自ら見出した一例として本稿において示した。

注

1 以下、本稿において、広島大学短期交換留学プログラムを「HUSAプログラム」と称する。

2 日本語能力試験2級又はTOEFL500点以上か、それと同等の日本語能力または英語能力を有することを応募条件としている。

3 喜多村の「学生消費者の時代—バークレイの丘から—」参照。

4 例えば、江渕（1991：15）は、日本人が留学生を善意から特別扱いしがちであることを指摘し、それが差別に転化することになる可能性を指摘すると同時に、留学生と日本人学生を平等に扱うことの意味について見解が分かれていることを述べている。留学生と日本人学生を全く同じに扱うことが逆に差別と捉えられる危険性もあり、日本における留学生の支援がどうあるべきかについては今後も検討していく必要がある。

5 短期交換留学プログラムが大学にもたらした成果及び今後の課題については、「英語による『短期留学プログラム』がもたらした国立大学の国際化—短期留学推進制度の10年—」（野水2006）を参照。

6 「堪能」という言葉は主観的な表現であるが、本稿では、英語で行われる授業を受講可能なレベルを「英語堪能」、日本語で行われる授業を受講可能なレベルを「日本語堪能」という表現を用いて表した。

7 HUSAプログラムで開講されている英語による授業の分野についてはp.23参照。

8 例えば、中嶋（2004：182－199）、De Wit（2002：183－192）参照。

9 グローバル時代におけるカリキュラムの国際通用性と生涯学習及びITの利用についての考察は、恒松（2006B：30－32）参照。

10 広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)には、2003－2004年度に46名、2004－2005　年度に41名、2005－2006年度に50名、2006－2007年度に41名の留学生が参加し、広島大学に１年または１学期間短期留学している。2007年　１月の時点で広島大学短期交換留学プログラムの協定大学数は20カ国54大学（University Studies Abroad Consortium［USAC］を含む）である。USACを通じてプログラムに参加できる学生を含めると大学数は54大学を上回る。プログラム開始時点である1996年の参加留学生数は17名であったが、年々応募者は増加の一途をたどっている。HUSAプログラムの担当人員数の側面からは40名以上の受け入れは大変困難な状況にあり、今後より多くの交換留学生を受け入れるためには受け皿となる支援体制の整備が急務である。さらに、2007年１月の時点では、HUSAプログラムでの受け入れ留学生の合計は389名、日本人学生派遣数の合計は237名と、受け入れ超過となっている。広島大学からの日本人学生の派遣のための対策も今後の課題である。

11 例えば、「日本語・日本文化研修留学生」（国費外国人留学生）のプログラムでは、日本　の大学において日本語能力及び日本事情、日本文化の理解の向上のために教育を受けることを目的としており、日本の大学において日本語により履修が可能な程度の日本語能力を有することを条件としている。このようなプログラムと比較して、留学先の日本でその国の言語でない英語で授業を受講できるHUSAプログラムの環境は特殊な環境であるといえる。広島大学に在籍する留学生数は学部生・大学院生・研究生を含め、ここ数年は700名を超えている。

12 例えば、2005－2006年度HUSAプログラムには、14カ国の30大学から50名の留学生が参加した。

13 HUSAプログラムではプログラムの詳細と協定大学及び参加留学生のデータを掲載したパンフレットを毎年発行している。HUSA Information Package 2007－2008を参照。

14 P.21以降を参照。

15 'Regular course'の場合、HUSAプログラムの留学生は日本人学生と共に授業を受講することになる。また、外国人教員によって日本人学部生向けに開講されている授業の場合、教授言語が英語である場合が多く、HUSAプログラムの留学生も授業を受講している例が多い。

16 広島大学留学生センターでは初級から上級までの５レベル（Elementary　Japanese Ⅰ, Elementary Japanese Ⅱ, Intermediate Japanese Ⅰ, Intermediate Japanese Ⅱ, Advanced Japanese）の日本語の授業を開講している。レベル１（Elementary　Japanese Ⅰ）の受講者を除き、プレースメントテストの結果最も適切であると判断されたレベルともう一つ上のレベルの授業を同時に受講することができる。例えばレベル２（Elementary Japanese Ⅱ）の学生は、レベル２に加えレベル３（Intermediate Japanese Ⅰ）の授業を同時に受講することができる。

17 大学院生も'research　student'としてHUSAプログラムに参加できる。その場合、HUSAプログラムに申請する時点で事前に学生自身が研究指導の担当を依頼する教員に連絡をとり、承諾を得ておく必要がある。HUSAプログラムに参加する大学院生は毎年１名から２名程度である。

18 HUSAプログラムに参加する留学生は大多数が10月から始まる秋学期に来日し、春学期と合わせて２学期間留学する。参加者の中には秋学期または春学期のみ、春学期から１年間滞在する例もあるが、それは毎年１名から３名程度である。

19 2005年秋学期に日本語の授業を受講したHUSAプログラム留学生の合計は44名であり、2006年春学期に日本語のレベルが上がった学生数は32人である。2005年秋学期の参加時点で既に日本語がレベル5の学生はレベルアップをすることはない。それ以外の学生の中には、レベルが上がらず同じレベルを受講する学生も数名おり、また2学期目には日本語の授業を受講しない学生も存在した。

20 大学院生は別枠で考察したいので、本稿でのデータ処理からは除いた。2005－2006年度には大学院生が一人中国の協定大学から参加した。堪能言語は日本語で工学部にて研究を行った。

21 日本語レベルが5で日本事情の授業または日本語で行われる授業を受講し、同時に英語で行われる授業を受講している場合は、「英語及び日本語両言語で授業の受講が可能」とした。

22 「英語堪能」の学生は、英語と日本語のうち、「英語のみ堪能」で参加した学生を指す。したがって「英語堪能」の学生の中に「英語及び日本語両言語とも堪能」な学生は含まれない。また、HUSAプログラムの協定大学にも留学生が在籍しており、その留学生が留学先である協定大学からHUSAプログラムに参加する例がある。その場合は出身国をその留学生の国としてデータ処理した。したがって、留学生の国別についてのデータには、協定大学のある国以外の国も含まれる例がある。例えば、2005－2006年度では、ドイツの協定大学に留学しているシンガポール及び中国からの留学生がHUSAプログラムに参加している。

23 スポーツ及び音楽の授業を除く。また日本語上級（レベル5）用の日本事情の授業の受講者数は除く。日本事情はレベル5の授業の一環として行われており、留学生用に開講された授業であるので、一般の日本人向けの授業と区別した。

24 P.20のグラフ7の「英語及び日本語両言語堪能」で参加した留学生の国別参加学生数（2005年秋学期）とP.23グラフ12の「英語による授業と日本語による授業を同時受講している学生数（2005年秋学期のみ）の合計数が一致しないのは、日本語が上級（レベル5）であっても、必ずしも日本語で行われる授業を日本人学生と共に受講していない学生が存在するからである。

25 名古屋大学留学生センター外部評価報告書2003を参照。

26 Japanese Society and Gender Issues（筆者担当）では、せっかくの日本留学において授業で日本人学生と交流できるよう、日本人学生にディスカッションのセッションに参加してもらい、日本での男女役割分担等について留学生と意見交換をしてもらった。広島大学の日本人学生の実際の英語力と英語で行われる授業への参加希望についての考察は、「短期交換留学プログラム留学生のための英語で行う授業の日本人学生への開講ニーズ調査」（恒松：2006A）を参照。広島大学では、日本人学生が英語で授業を受講できるレベルに到達することを目標とし、少しレベルを下げた英語による授業を2006年度に開講した。このプロジェクトでは、広島大学は自身がメンバーである大学コンソーシアムINU（International Network of Universities）を通じて、海外の大学と共同で情報通信技術を活用した国際カリキュラム構築を進め、2006年度に教養的教育科目として「INU特別協力講義A：Peace and Change」「INU特別協力講義B：American Culture and Society」を開講した。詳細は恒松（2006C：21）参照。

27 従来の「ディシプリン型」とは、各学部・学科で確立された個別の専門的な学問の方法論や理論に

沿った研究方法を指す。「ミッション型」とは、多様な専門分野を取り入れ、一つの専門的方法論に頼らない多面的な学問のアプローチともいえよう。「学際的」(interdisciplinary) といった言葉でも表現される。

28 スピリチュアリティ (Spirituality) は大変定義しにくい言葉であるが、例えば、Tisdell (2003：28－30) の言葉を要約すると、「世界における人生の意味と目的探求、全体における他とのつながりや事象の流れにおける真の自己探求についての認識と自己実現」とでもいえよう。現在、「外国人留学生・日本人学生に対する国際教育の改善を目指した調査研究」と題し、大学教育と学生の生きがいの問題をスピリチュアリティと関連付け、国際的視野から研究を進めている。スピリチュアリティの重要性は、心理学、哲学、神学、教育、ビジネス、理論物理学、医学、認知科学、神経科学、現象学など、科学を含めた幅広い分野で国際的に認識されつつあり、大学教育におけるスピリチュアリティの重要性について認識を深め留学生を含めた学生の意識改革に向けて研究を進めたい。

29 P.14－15を参照。

引用文献

有本章 (2003) 高等教育シリーズ122『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部

江渕一公 (1997)『大学国際化の研究』玉川大学出版部

江渕一公 (1991)「在日留学生と異文化教育—研究の視覚と課題」『異文化教育』No. 5, pp. 4 －20.

喜多村和之 (2002) 中公新書1631『大学は生まれ変われるか—国際化する大学評価のなかで』

喜多村和之 (1996)『学生消費者の時代—バークレーの丘から—』玉川大学出版部

喜多村和之 (1989)『大学教育の国際化—外からみた日本の大学 (増補版　第2刷)』玉川大学出版部

恒松直美 (2006A)「短期交換留学プログラム留学生のための英語で行う授業の日本人学生への開講ニーズ調査」『広島大学留学生センター紀要』第16号, pp.31－53.

恒松直美 (2006B)「短期交換留学プログラムにおける英語による授業の日本人学生への開講—カリキュラムの国際通用性と生涯学習—」『総合学術学会誌』第5号, pp.29－36.

恒松直美 (2006C)「大学国際戦略—国際カリキュラム構築と日本人学生の参加—」『広島大学留学生教育』第10号, pp. 9 －28.

恒吉僚子 (2006)「支配としての英語、文化としての英語、戦略としての英語」『国際戦略としての教授用語の英語化—短期留学プログラムの多国間比較研究』[平成15－17年度　科学研究費補助金　基盤研究B(2)] 第1章 (p. 1 －12)

中嶋嶺雄 (2004)『21世紀の大学—開かれた知の拠点へ—』論創社

名古屋大学留学生センター (2003)『名古屋大学留学生センター・外部評価報告書　1998

－2002　―国際交流拠点としての留学生センター―』(2003)

野水勉 (2006)「英語による「短期留学プログラム」がもたらした国立大学の国際化―短期留学推進制度の10年―」『国際戦略としての教授用語の英語化―短期留学プログラムの多国間比較研究』[平成15－17年度　科学研究費補助金　基盤研究 B(2)] 第２章 (p. 13－27)

Gale, Fay, 'Where does Australian higher education need to go from here?', in J. Sharpham and G. Harman (eds), *Australia's Future Universities*. University of New England, NSW 2351, 1997.

Hiroshima University Study Abroad (HUSA) Program Committee, *HUSA Information Package 2007-2008*, 2007.

Kelly, Patricia, 'Internatinoalizing the curriculum: For profit or planet?', in Sohail Inayatullah and Jennifer Gidley (eds), *The University in Transformation : Global Perspectives on the Futures of the University*. Westport, Connecticut and London : Bergin & Garvey (161－172), 2000.

Spies, Philip, 'University traditions and the challenge of global transformation', in Sohail Inayatullah and Jennifer Gidley (eds), *The University in Transformation : Global Perspectives on the Futures of the University*. Westport, Connecticut and London : Bergin & Garvey (19－29), 2000.

Tisdell, E. J., *Exploring Spirituality and Culture in Adult and Higher Education*. San Fransisco : Josey-Bass, 2003.

De Wit, Hans, *Internationalization of Higher Education in the United States of America and Europe : A Historical, Comparative, and Conceptual Analysis*. Westport, Connecticut, and London : Greenwood Press, 2002.